



TITLE:

1-10 小澤泉夫先生の思い出 (1. 京大  
地物研究の百年(集録Ⅰ、Ⅱに続く))

AUTHOR(S):

小林, 芳正

---

CITATION:

小林, 芳正. 1-10 小澤泉夫先生の思い出 (1. 京大地物研究の百年(集録Ⅰ、Ⅱに続く)). 京大地球物理学研究の百年(Ⅲ) 2011, 3: 68-69

ISSUE DATE:

2011-10-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/169932>

RIGHT:

# 小澤泉夫先生の思い出

小林芳正（1958 年卒）

小澤泉夫先生が 2011 年 3 月 14 日に亡くなられたことは、6 月になってから同窓会の通信で知った。前年の 11 月、私の妻が亡くなったとき、先生から香典を送っていただいたりしていたのに迂闊だった。あとになって奥様にお聞きしたところでは、先生の訃報は、新聞社にもどこにも通知がなかったそうだから、私が気づかなかったのも仕方ないことだったけれど……。先生はもうご高齢だとわかっていたし（大正 11 年生まれ）、ずいぶんご無沙汰してしまったので、近々一度お訪ねしたいと思っていた。

先生と私は専門も違うし、それほど密に接してきたわけではない。だが、最初にお世話になったのが 1957 年の学部卒論のとき、先生が定年退官された 1986 年、私はその講座の助教授だったのだから、お付き合いの期間は相当長い。私の学位審査も先生が主査だった。卒論の頃、先生は第 4 講座（応用地球物理学）の助教授で、教授は佐々憲三先生だった。この年、佐々先生は理学部長に選出され多忙だったため、学生は減多にお目にかかれず、私たち卒論生が個別に会っていただけなのは、卒業研究のテーマを与えられたときと、中間報告に一度、それから卒論の講座内発表会のときの 3 回ぐらいだった。その他の期間、私は助教授室の一隅にデスクをいただき、もっぱら小澤先生の指導の下に研究を進めたのである。

テーマは「ハイドロフォン（水中感震器）の試作」だった。私はいろんな書物で地震計や換振器について勉強し、それなりの設計をして、教室の工場に製作を依頼したが、特殊鋼の薄板とか、必要な部材は小沢先生に取り寄せていただいた。一番困難だったのは、水压変化を測る計測器だから、感度をよくするには受圧板がわずかな圧力変化で動かなければならないのに、そのような柔らかい受圧板では高い静水压に耐えられず、大きい水深で使えなくなることだった。後でわかったことだが、高い静水压に対抗するには受圧板の裏側にも静水压を入れてバランスさせ、動水压だけ測定するようにすればよいのである。そんなことは知らなかったから、この本質的困難は最後まで克服できず、結局、高い静水压に耐えるために硬い受圧板を使い、感度不足は増幅器で補うことにした。この試作品は、卒論発表会で佐々先生に「これでは落第だな」といわれてしまった。もちろん落第はしなかったから卒業はできたけれど、佐々先生が「指導したものが悪い」と小沢先生だけを叱られたのは申し訳ないことだった。

小澤先生は若い頃から耳が遠く、慣れない人との対話が困難だった。特に低音が苦手らしかったが、私の声は高めで聴き取りやすかったらしく、そのため、卒論の頃、私は先生を訪ねられた方と先生との通訳をときどき勤めていた。こんなことからか、先生は私のことは信用してくださっており、私にとっての小澤先生は、他の方々が言われるほど、付き合いづらくはなかった。私が 1981 年に第 4 講座助教授として教室に戻ってからも、先生との厄介な交渉はよく私にゆだねられた。あるとき先生が欠席中の院入試の問題検討会で、先生の出題された問題の一部を変更して欲しいことになった。こういう時、先生の説得はとても難しいのだと出題委員長をはじめ皆さんがいわれるのである。そして先生の下承を得る役は私が仰せつかった。さっそく、病欠か何かでお休みだった先生をお宅にお訪ねし、理由を説明してお願いしたところ、先生は二つ返事で承知してくださったのだった。

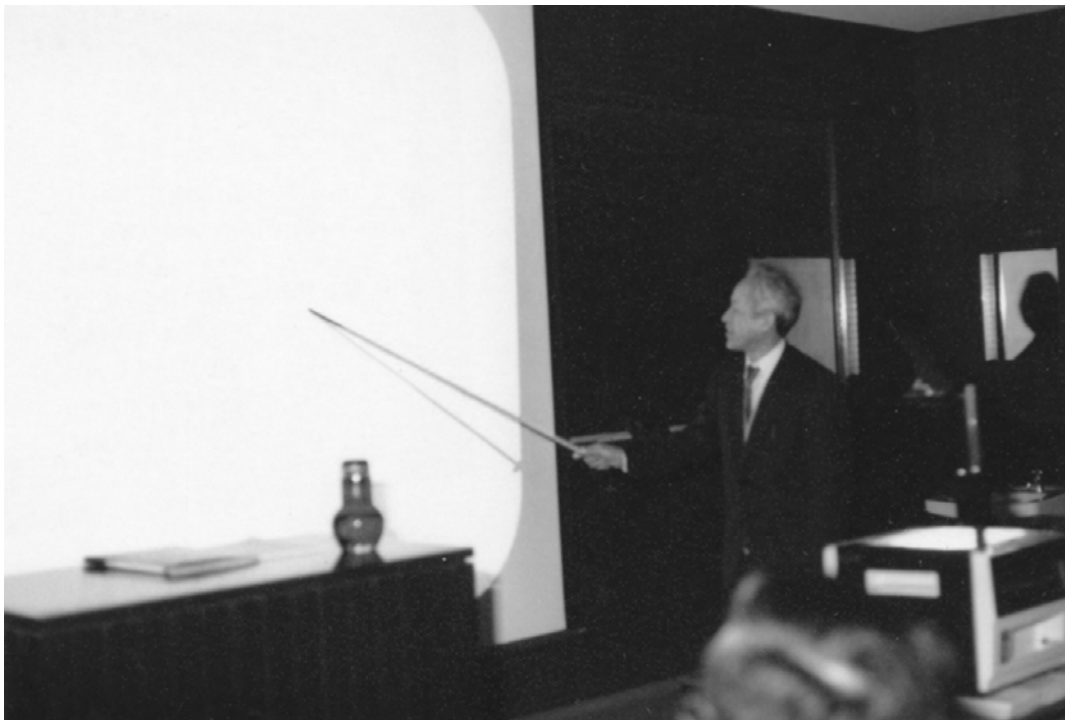
先生は頑固で、人のいうことなどあまり聞かないというのが大方の見方だったが、それは先生の難聴から来たものではないかと私は思っている。人の話が聞き取りにくいために、だまされた（と思われた）経験が、先生には何度かあったのかもしれない。だからよくわからないときは「ノー」というのが先生の通常の対応になった。その結果、相手のいうことがよくわからなかったために誤

解して拒絶してしまわれるようなこともしばしば起こったのだろう。先生が「〇〇君はおかしいですよ」と私に注意を喚起された〇〇君が、実は全然おかしくなく、ただごく低音なだけだった例を私も経験したことがある。つまり難聴が先生を必要以上に用心深くさせ、対人関係に多くの不都合を生じさせたのだと考えられる。

私にとっての先生は、大抵はおだやかで、話の分からない人ではなかった。私は、先生が警戒心を抱かずに付き合うことのできた数少ない後輩・弟子の一人だったのかもしれない。その理由はたぶん、私の声が聞き取りやすかったことと、そしてもっと大きくは、私を学生の頃から知っており、単純な私の性格までよくご存じだったからだと思う。

こんなハンディのあった先生だから、人との交渉をとまなうような、いわゆる政治的・行政的なことには関心を示されず、終戦直後から定年退官に至る 40 年もの長きにわたって、逢坂山その他で地殻変動の観測的研究を営々として継続された。また最晩年まで常に Jeffreys など古典をひもとき、理論の研鑽も怠られなかった。雑音に煩わされず、己の信ずる道だけを最後まで歩み続けられた。

でも、先生がこんな駄文をご覧になったら、あのちょっとはにかんだような苦笑で応えられるような気もする。わかってないなあと……。先生のご冥福をお祈りします。



**写真** 退官記念講演中の小澤先生（昭和 61 年 3 月 28 日）、講演題目は、「地殻のひずみの観測とその思い出」。